

靖国の神と神の概念

定方 晟

2001年の日本の夏は近年になく暑い夏だった。気候的に暑い日が続き、政治的に国中が熱したからである。政治的に熱したというのは、歴史教科書問題と小泉首相靖国神社参拝問題をめぐって左右両陣営が熾烈な議論を展開したことを意味する。

小泉首相靖国神社参拝問題に関していうと、首相はかねてから終戦記念日の8月15日に靖国神社に参拝することを公言していた。ところが日本の内外からの参拝批判の声の高まりを受けて、首相は突如、日を早め、8月13日に参拝をおこなった。このいわば前倒し参拝について左右両陣営からまた激しい賛否両論がまきおこった。右派陣営は、参拝は終戦記念日におこなうのでなければ意味がない、前倒ししたことによって日本は政治的主体性を回復する絶好のチャンスを失ったという（産経新聞、石原東京都知事など）。左派陣営は、たとえ前倒ししても、参拝すること自体が問題である、それは政教分離を定めた憲法に違反し、近隣諸国の反発をひきおこすという（朝日新聞、毎日新聞など）。

さて、そんな中で、毎日新聞の中につぎの記事をみつけた。

祈りとは「聴き届けてもらえることへの期待に伴われた、真っ当な欲望の表現。……

人間は、彼の祈りとまた彼の（祈りが捧げられる）神々によって、裁かれるのである」と
フランスの哲学者アランが述べている。人間は祈る神々に裁かれるとは厳しい言葉だ。

小泉首相は、靖国の神々によって裁かれている。（8月14日、毎日新聞、〈余録〉）

私はこれを読んですぐに「違う！」と思った。靖国神社という名前にはたしかに神という言葉が含まれている。しかし、靖国神社でいう神とアランがいう神とはまったく違っている。それを同列に論じるのは見当ちがいもはなはだしいと思った。

◆自然の神

私がかねがね考へていることの一つに、神という言葉はほとんど言葉としての機能を果たしていないということがある。神という言葉を使うひと、また聞くひとは、その言葉でなにか目に見えない存在、尋常ならざる力をそなえた存在を連想する。ひとびとが神について理解を共通にするのはそこまでである。それ以外にひとが神について想像することはまちまちである。あるひとは神は何人もいると考え、あるひとは一人しかいないと考える。あるひとは山や川が神だと考え、あるひとは世界の創造者、支配者が神だと考える。この違いに注意を払わずに神について議論することは、家という言葉でコンクリートの家を連想するひとと、同じ言葉で木

造の家を連想するひとが家について議論することに似ている。場合によっては、家という言葉で建物を思うひとと家庭を思うひとの議論に似ることにもなりかねない。

今日の日本では、神といえば、キリスト教的な神を連想するひとが多いだろう。日本の神話は教えられず、巷にはキリスト教的教養があふれているからである。こうして今日では、日本人にとっても、神はひとに語りかける人格者であり、単数の神である。

しかし、キリスト教の影響が世界にこれほど広くおよぶ前には、世界のほとんどすべての場所でひとは自然を神と見なし、神はいく人も存在すると考えていた。だからギリシャではゼウスは雷電（いなずまを象徴する武器）をもち、雷的な性格をそなえ、ヘーリオス（Helios）は太陽を意味し、同時に太陽神を意味した。インドではインドラが金剛杵（vajra, いなずまを象徴する武器）をもち、降雨を司どり、スーリヤ（surya）は太陽を意味し、同時に太陽神を意味した。（ヘーリオスとスーリヤは語源が同じ。）日本ではアマテラスオオミカミ（天照大神）が太陽的な性格をそなえ、スサノオノミコト（須佐之男命）が嵐的な性格をそなえる。

古代人は自然現象を科学的に理解することを知らず、他の仕方でそれを理解するしかなかった。たとえば降雨については、降雨のほかに蒸発があること、すなわち水が大気中を循環することを知らなかつたために、天上には雨を供給する無尽の海があると考えた。インドの神ヴァルナは天の支配者でありながら、「海（または川）の主」（sindhu-pati）と呼ばれた（Rg-Veda, 7-64-2）。この神は仏教に取り入れられて「水天」となった。（本学の武道館の前に水天宮の門がある）。

雷については、それが電気現象であることを知らなかつたので、天上に超人的な存在がいて、人間の不正を^咎していると考えるしかなかつた。雷鳴はかれが発する怒りの声であり、雷光はかれが打ち下ろす鋭い刃であった。雷のこのイメージは少し形を変えて現代にも生きている。「パリの空の下」（Sous le ciel de Paris）というシャンソンでは、「パリの空が恋人たちに嫉妬してごろごろ雷鳴を轟かせるが、パリの空はそんなに意地悪ではないから、最後にはやさしく虹をかけてくれる」と歌われる。神話の起源のいくつかについては、雷現象が解明のヒントを提供してくれることがあるようだ。柱が神の依りしろとされるのも、それが単に天に向かって立っているからではなく、それに（あるいはそれに似た高木に）雷が落ちることに関連しているかもしれない。

インド・ヨーロッパ語に属する諸言語では、神を表す多くの言葉が語源を共通にする。すでに述べたヘーリオスとスーリヤがその例であるが、ギリシャ語のゼウス（Zeus）、ラテン語のデウス（deus）、インド語のディヤウスないしデーヴァ（dyaus,deva）も語源を共通にする。インドの場合には、「リグ・ヴェーダ」に「ディヤウシュ・ピター」（dyaus pita）という表現があり、これは「父なる天」を意味し、ローマ神話のユピテル（Ju-piter・ジュピター）と語形を同じくする。日本では、きりしたん文書の「でうすばあどれ」がこれに相当する。

「父なる天」の「父」は単に権力者を意味するのではない。生物学的な雄をも意味する。「父なる天」は「母なる大地」とペアになつてもろもろの自然を生みだす。父は上にあり、母は下にあり、両者のあいだから山、川、月、星が生まれる。日本神話の場合、イザナキとイザナミが父と母の役割を演じて自然界を生み出す。イザナキが天の沼矛^{アサヒノタケシ}を海中に挿し入れてかきまわすと、その矛から塩水がしたたって固まり、島になったというのは明らかに性交と出産を

寓意している。イザナキはイザナミが黄泉の国へ行ったあと、単独でアマテラスオオミカミ（太陽）、ツキヨミノミコト（月）、スサノオノミコト（たぶん嵐）、山川草木を生み出す。

インド語の場合、神（deva）の語源を説明することが可能である。神（deva）は語根「輝く」（div,dyut）から派生し、「輝くもの」を意味する。なぜ「輝く」が「神」の語源になったのだろうか。天空はその高さ、広さによって、ひとびとに畏敬の念を与え、それが輝いて見えるからか。太陽は偉大であり、それが輝いて見えるからか。あるいはたんに光は人間にとて最も好ましいものだからであろうか。私はもしかすると、この語源にもいなずまの輝きが関係しているのではないかと思う。いずれにしても、英語の divine という言葉はインド語の語源解釈を通じて深みをますだろう。

英語の god の語源もインド語で説明できるらしい。インド語に huta という言葉がある。huta は動詞 hu（祀る）の過去分詞で、「祀られるもの」を意味する。god はこの huta と同じだとうのである（The Oxford English Dictionary）。ちなみに「護摩」（homa）も hu から派生した言葉である。

◆人間の神

インド・ヨーロッパの神々や日本の神々の特徴として、自然が神格化されたということのはかに、きわめて人間的であることがある。かれらは争ったり、恋をしたり、子供を生んだりする。神が世界を創りだす過程は人間の性交になぞらえられたことはすでに述べた。ユダヤ教やキリスト教の神が人間から質的に隔絶しているのに対し、きわめて人間くさい。これは神と人間のあいだのけじめを曖昧にし、古代の権力者が自分の祖先を神の系譜に結びつけることを容易にした。

インドではシャカムニがスーリヤ・ヴァンサ（日種、すなわち太陽神の系譜）に結びつけられた。日本では天皇家が神系譜に結びつけられた。すなわち初代の天皇である神武天皇は、高天原から地上に降ったニニギノミコトの曾孫であるとされる。

上掲のインドと日本の例は後世のひとがつくった神話にすぎないが、ギリシャ文化圏とイラン文化圏にはれっきとした歴史上の人物が自らを神の子と称した例がめずらしくない。アレクサンドロス大王は自らをゼウスの子、アポロンの兄弟と称した。かれは若くして世界征服の大事業をなしとげたから、神の子を任じても不思議はないかもしれない。

アレクサンドロス以後には、かれの後を継いだギリシャ人やイラン系の王たちが何人も「神の子」を自らの称号に用いた。あるギリシャ人の王は Theopator を称した。これは「神を父とするもの」を意味する。イラン系の王朝であるパルティア朝のある王はミトラダテスという名をもっていた。これは「ミスマラ神から授かったもの」、すなわち「ミスマラ神に祈って授かった子」を意味するが、上記のミトラダテスは「ミスマラ神から授かった子」にとどまらず、ミスマラの化身とさえされたという（エリアーデ『世界宗教史』§ 212）。ローマではユリウス・カエサルを祀る神殿が建てられ、また多くの皇帝たちが神格化された（エリアーデ『世界宗教史』§ 226）。インドを支配したイラン系の王朝であるクシヤーナ朝の王たちは devaputra というインド語の称号を用いた。これは「神（deva）の息子（putra）」を意味する。

日本でも天皇の先祖が神に結びつけられている。これにはギリシャ・ローマやイランの影響を考えることはできないだろうか。江上波夫氏の騎馬民族説を参照すれば、西方文化が中央アジア経由で日本の支配層に達している可能性は十分考えられる。日本神話のイザナキノミコトの黄泉くだりの物語とスサノオノミコトの怪物退治・娘救出の物語は、ギリシャ神話のオルペウスの黄泉くだりの物語とペルセウスの怪物退治・娘救出の物語によく似ている。これが文化传播の跡を証するものならば、日本の天皇の神格化にもギリシャ・ローマやイランの王の神格化の影響があったと考えることは荒唐無稽ではないだろう。

かつて、クシャーナ朝の王のタイトル *devaputra* は中国の「天子」の訳語であるとする説が有力であった。言葉そのものはインド語であるが、その観念は中国のものだというのである。クシャーナ朝は後漢の時代に栄え、両朝のあいだには接触があり、クシャーナ朝の王は外国文化を取り入れるのに積極的であり、インドからはインドの称号 *mahārāja*（大王）を、ローマからは *kaisara*（Caesar）を取り入れたくらいだから、中国から「天子」を取り入れたとしても、少しもおかしくなかった。しかし、その後の研究の成果によると、「神の息子」の観念はギリシャ・ローマやイランの伝統に由来すると考えるほうが妥当のようである。

しかし、中国の「天子」そのものもまた「神の子」を意味することは間違いないだろう。天はわれわれの頭上に広がる世界を意味し、そこにおいて全世界を支配する存在が天帝と呼ばれる。天帝はわれわれのいう神と同じと考えてよいだろう。そして天帝の子が「天子」と呼ばれる。地上を支配する人間が天子と呼ばれるのは、かれが天帝から地上の統治を任せられた神の子と見なされるからであろう。

天帝は単に「天」とも呼ばれる。空間的な概念である「天」が「天の支配者」をも意味するに至った理由としては、天帝を直接に「天帝」と呼ぶことをはばかって、その居所あるいは属性で呼んだということが考えられる。（日本語の「陛下」、英語の“Your Majesty” 参照）。いずれにしても、インドから中国に仏教がやってきたとき、中国人はインド語の空間をさす言葉とそこに住む超人的存在をともに「天」という言葉で訳すことができた。兜率天、有頂天の場合は、「天」は空間を意味する。梵天、帝釈天、韋馱天の場合は、「天」は神を意味する。

インド語の空間をさす言葉とそこに住む存在が中国語でともに「天」と訳された理由はインド側にもあるようである。というのは、インド語では天空をさす言葉とそこに住む存在が極めて似た言葉で呼ばれていたからである。たとえば、「三十三天界」は *trayaś-trīṁśāḥ*、「三十三天界の住人」は *trāyaś-trīṁśāḥ* と呼ばれていた。

「デーヴア」が「神」と訳されなかつたのはなぜであろうか。理由として考えられるのは、インドの神は概して天空に住む、すなわち身体性をもつことがある。これに対し、中国語の「神」は目に見えない、いわくいいがたい存在をさすようである。したがって、具体的な特徴をそなえ、人間のようにふるまうインドのデーヴアをさすのに「神」はふさわしい言葉ではなかつたということであろうか。

インド・ヨーロッパ語で神をさす語は「輝く」を語源とすることはすでに述べた。中国語の「神」や日本語の「かみ」の語源はなんだろうか。「神」という漢字のつくり「申」はいなずまが伸びる姿を表したものだという。電の「申」と同じだという。しかし、「神」は「いわくいいがたいもの」をさす言葉として、こころをも意味するようになった。こころをさすのに「精

「神」という熟語が存在するゆえんである。「精」はついで青くした米（日本では白くした米）を意味し、玄米（黒い米）に対する言葉であるが、それとともにエキスを意味する言葉ともなり、人間のエキス、すなわちこころを意味するようになったという。では、日本語の「かみ」の語源はなにか。「上」の意であろうか。もしそうなら、「かみ」は中国語の「天」と発想を同じくする言葉といえよう。

このように「神」という語が「精神」という熟語の中に使われるとすれば、人間にはだれにも精神がある以上、人間が神になることはそう難しいことではない。したがって、日本で死者が神に昇格し、崇められるのもそんなに不思議なことではない。だから、応神天皇は八幡神社で崇拝されている。菅原道真は天神（雷神）となり、天満宮に祀られ、豊臣秀吉は豊國神社に、徳川家康は東照宮に祀られている。これは「精神」という言葉を介して神と人間が結びつくことを表わしている。

一つの言葉が神と人間を結びつける傾向はインドでも見られる。すなわち、クシャーナ朝（西暦2世紀ごろ）には、神々と王の一族と一緒に祀る「デーヴァクラ」（devakula）と呼ばれる建物があった。クラ（kula）は家系、宮殿、寺院を意味する。デーヴァ（deva）は神を意味するとともに王を意味する。デーヴァの女性形デーヴィー（devī）は女神を意味するとともに王妃を意味する。神と王、女神と王妃がそれぞれ同一の言葉で呼ばれるところに現人神のアイデアが生まれる素地があるだろう。

◆ユダヤ教・キリスト教の神

ユダヤ教やキリスト教ではヤハウェ以外に神は存在せず、人間が神になることはありえない。人間はあくまでも神の被造物にすぎない。しかし、そのキリスト教においても、神の概念は明白であるとは決していえない。

西暦2世紀、クレメンスとヴァレンティノスはどちらもキリスト教徒でありながら、「神」について異なる観念をもっていた。前者は神は創造主、支配者、審判者、すなわち今日のキリスト教が教えるところの神であるとしたのに対し、後者はそのような神は軽蔑に値いし、眞の神の下位にあり、正しくは「デミウールゴス」（Demiurgoς、造物主）と呼ばれるべき存在であるとした。結局、前者の流れが正統派となり、後者は前者によって異端の烙印を押されることになった。（エレヌ・ペイゲルス著、荒井／湯本訳『ナグ・ハマディ写本』、白水社、1996、pp. 86–87.）。

ヴァレンティノスはグノーシス主義者であったが、グノーシスの思想についてエリアーデは記している。

その二元論的な体系においては、旧約聖書の造物主がうちたてた律法と正義は、善なる神が顯わした愛と福音に対比させられている。善なる神は、律法の奴隸となっている状態から人間を救うために、息子であるイエス・キリストを遣わした。イエスの身体は物質的なものではないが、感じたり苦しんだりする力を持っている。イエスは教えのなかで善なる神を称えつつ、それが旧約聖書の神を指すものではないことをはっきりさせないよう注意している。

ヤハウエが超越神の存在を知ったのは、実はイエスの教えからだったのである。ヤハウエは、イエスを迫害者にひきわたすことによって復讐した。しかし、十字架上の死は救いをもたらした。犠牲によって、イエスは人類を造物主から救いだすことになったからである。しかしながら、世界はヤハウエに支配され続け、歴史の終わりまで信者は迫害されることになる。そして、善なる神がみずからを顕わすのは、そのときがはじめてである。この神は信仰のあつい者を王国に受け入れ、その他の者を、物質や造物主とともに完全に消滅させることになる。(エリアーデ『世界宗教史』§ 229)

キリスト教を今日あるキリスト教の形でしか知らない人には、エリアーデのこの含蓄ある文章は理解できないだろう。この文章を理解するためには、グノーシス派キリスト教徒が旧約聖書の神ヤハウエを徹底的に軽蔑した事実を念頭におかねばならない。かれらにとって、ヤハウエはろくでもない宇宙を創って「よし」というほど愚劣な存在である。ヤハウエは自分のほかに真の神がいて、自分は三次的、四次的な下級の神にすぎないので、無知のために自分が唯一の神だと思いこんでいる。グノーシス派キリスト教徒がヤハウエを軽蔑するもう一つの理由は、ヤハウエが「われは嫉む神なり」と宣言して恥じないことである。

だから、グノーシス派キリスト教徒にとって、神は二つある。「律法と正義をうちたてた造物主」と「愛と福音を顕わす善なる神」とである。イエスが称えたのは後者であったが、イエスはそのことをはっきりとは示さなかった。しかし、ヤハウエはイエスの語る言葉から、イエスが称えている神は自分のことではないことに気づいた。ヤハウエは自分より偉い神がいることをやっと知ったのである。

妬む神ヤハウエは自分以外の神を称えるイエスにただちに復讐した。すなわちイエスを迫害者に引き渡した。だがイエスを破滅させようというかれのもくろみははずれた。なぜならイエスを十字架に掛けたことによって、かれを人類の救済者にしてしまい、ヤハウエは自分の桎梏下にしばりつけておいた人々をイエスに解放されてしまうことになったからである。

それでも、終末がやってくるまでは、ヤハウエは世界を支配することができる。だが、終末がやってくると、善なる神（ヤハウエではない）が姿を現わす。信仰者はこの神の王国に受け入れられ、その他の者と物質とヤハウエは完全に消滅させられる。

以上がエリアーデの紹介によるグノーシス派キリスト教徒の考え方である。グノーシス派キリスト教は異端とされて姿を消した。今日のキリスト教徒は神という言葉でどのような神を考えるであろうか。おそらく妬む神ではなく、愛の神であろう。しかし、かれらの聖書にははっきり「われは妬む神なり」（「出エジプト記」20：5）と書いてある。ということは、キリスト教徒のあいだですら、神の概念は一定していないということである。

イエスは神であるか人間であるかをめぐっても、キリスト教徒のあいだにさまざまな考えがある。4世紀の教父アリウスはイエスを神と認めながらも、イエスが神の子である以上、イエスは時間の中のある一点で生みだされたのであり、永遠の存在ではなく、造られたものであるから、父なる神よりは劣ると主張して、異端の烙印を押された。ほかにもさまざまな見解がある。キリスト仮現論（キリストの人間としての側面を否定的にみる）、キリスト両性論（キリストに神性と人性の両方を認める）、キリスト単性論（神性のほうを強調する）、三位一体論

(父と子と聖靈の3位格は1つの実体として存在するとする)、キリスト養子論(はじめ人間であったが、のちに神となったとする)、ユニテリアン(キリストの神性を否定する)等々。

イスラム教はキリスト教の「三位一体」論や「神の子」の思想を揶揄する。

決して「三」などと言うてはならぬぞ。差し控えよ。その方が身のためにもなる。アッラーはただ独りの神にましますぞ。ああ勿体ない、神に息子があるとは何事ぞ。

(『コーラン』4-169)

これはキリスト教で異端として斥けられたグノーシス思想が、他の宗教では現在でも正統として生きていることを示している。

こうなると、神という言葉はもはや言葉としての体をなしていない。『旧約聖書』によると、神は人間が天に届く塔(いわゆるバベルの塔)を作ろうとしたとき、その心の高ぶりを罰するために、ひとびとの言葉を乱し、建築の進行を妨げたという(『創世記』11:1-9)。その結果、今日世界に多くの言語が生じたことになるが、神はほかならぬ自分をさす言葉について最も念入りに攪乱を企てたということになろう。

キリスト教が日本にやってきたとき、デウス(Deus)はどんな日本語に訳されようとしたのであろうか。日本には神道や仏教があった。神道には天神とか天照大神という神がいた。秀吉はキリスト教禁令の布令の中で「日本は神國たる処、きりしたん國より邪法を授(け)候(う)儀、はなはだもって然るべからず」といっているから、日本人から見れば、キリスト教の神のライバルは天神や天照大神であったであろう。しかし、キリスト教徒から見れば、両者はあくまでも違う。キリスト教の「神」は大文字で書き始める単数の神(God)であり、日本の「神」は小文字で書かれる複数の神(gods)である。キリスト教徒は自分たちの神が日本の神と混同されることを恐れたに違いない。

一方、仏教をみると、そこでは最高の存在は仏(ほとけ)あるいは如来と呼ばれている。日本人最初のキリスト信者ヤジロウはキリスト教の神を大日如来として理解した。しかし仏(如来)は出自は人間であって、宇宙の創造者ではない。仏という言葉はキリスト教の神を呼ぶのにはふさわしくない。仏教にも神と名づけられる存在がいるが(たとえば執金剛神、鬼子母神)、仏よりは遙かに格の低い存在である。

日本のキリスト教徒は(あるいはポルトガルの宣教師たちは)結局、「でうす」と音訛し、「天主」と意訛することにした。「でうす」は漢字では「提字子」(まれに大臼)と書く。「天主」や「提字子」は中国で作られた訛語を日本が取り入れたものであろうか。

今日、日本ではキリスト教の神を「神」と呼ぶことが定着している。これは19世紀前半にアメリカのプロテスタントたちが「真神」という訛語を用いたことに影響されているらしい。カトリック教会で「神」が公用語と定められたのは1959年4月の全国教区長会議においてであった(『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988,p.321)。中国では一般には「上帝」と「神」が用いられ、プロテスタント教会ではもっぱら「神」が用いられるという。

なお、ユダヤ教では神をさす言葉に、普通名詞 Elohim、固有名詞 Jahweh がある。どちらも語源は不明であるという。Elohimは複数形であるが、尊敬の複数らしい。Elyonも神を意味するが、これは「至高の存在」を意味するという(Encyclopaedia of Religion and Ethics, Vol. 6, pp.

253 b - 254 a.)。イスラム教の神をさす言葉 Allāh は「自ら存在するもの」を意味するという (ibid., p. 299 a.)

◆靖国の神

さて、結論に入ろう。靖国の神は、神の概念がさまざまある中で、精神であり靈であるところの神である。ついさきごろまで生きて活動していたわれわれの仲間がなったところの神である。冒頭に引用した毎日新聞の「余録」の「フランスの哲学者アラン」が想像もしなかったであろうような神である。靖国の神を考えるのに、アランの神をもってすることは不当もはなはだしい。

「余録」にアランによる祈りの定義があげてある。祈りとは「聴き届けてもらえることへの期待に伴われた、真っ当な欲望の表現」であるという。俗なことばでいえば、おねだりするということである。そして余録子は小泉首相は靖国神社へ祈りにいったと考えている。

首相は靖国の神々に祈りにいったのか。そんなことはない。神々を慰めにいったのである。首相はつねづね「慰靈を慰めに行く」といっていた。首相が13日に発表した談話（14日の新聞に掲載されている）にもつぎのように述べられている。

私はここに、こうしたわが国の悔恨の歴史を虚心に受け止め、戦争犠牲者の方々すべてに対し、深い反省とともに、慎んで哀悼の意を捧げたいと思います。

ひとあっていうかも知れない。首相は哀悼の意を捧げたとき、「心やすらかにあられますよう」と思ったかもしれない。これこそアランのいう「欲望の表現」であり、したがって祈りであるのではないか、と。しかし、アランが「欲望の表現」の中にそのような願望までをも含めて考えていたとは思われない。キリスト教世界では、絶対者たる神にそのような祈りが捧げられることは考えられないからである。いずれにしても、首相は祈ったとはいっていない。首相の談話はかなり長いが、そのどこにも首相がなにかを祈ったということは書いていない。首相は端的に慰めにいったのである。

余録子はまた「小泉首相は、靖国の神々によって裁かれている」とも書いている。余録子がいいたいのは、戦死者の靈はこころならずも死に追いやられた恨みを首相に向け、首相を弾劾しているということであろうか。靖国神社の神々がそんなことをするはずがない。小泉首相にかれらの死の責任はない。靖国の神々は、その小泉首相が自分たちのところにきてくれると思えば、かれに感謝の念こそ抱け、裁くことなど夢にも思わないだろう。

余録の執筆者はアランのいう神、キリスト教的な神を靖国の神と誤解したために無意味な言説を二重三重に重ねたのである。靖国の神に限らず、日本の神々は裁かない。かつて日本では怨靈の存在が信じられていた。怨靈は敵に復讐をとげようとするが、それすら神に祀られるこによって、怨みを捨てるのである。

一方、ユダヤ教とキリスト教の神は妬み、報復する神である。「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。・・・あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神 (a jealous

god) であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼす」と宣言する神（「出エジプト記」20:3; 20:5）である。

キリスト教がヨーロッパに広がる前は、嫉妬は悪徳と考えられていた。西暦前5－4世紀のギリシャの学者たちの言葉にそれがうかがわれる。ヒッピアスはいった。

妬む者は他の人々に比べて二重に悪い。彼らは自己の不運に怒るのみならず、他人の幸福にも感情を害するからである。（ヒッピアス、「断片」）

アンティステネスはいった。

妬み深い人は、鎧によって鉄がむしばまれるように、己れ自身の気質によってむしばまる。（アンティステネス、「断片」）

おそらく、インドでも、中国でも、日本でも、嫉妬は悪徳の1つに数えられているにちがいない。ところが、ここに「わたしは妬む神である」と公言して憚らない神が出現したのである。このこと自体に私は驚かない。広い世界には変った民族や考え方があるにちがいないと考えるからである。私が驚くのは、このような不道徳な神を理想の神として受け入れ、敬愛することができる知識人の数の多さである。

以上、同じ「神」という言葉を用いても、それが意味するところはさまざまであることを示した。このことを知らずに、神について語ることは、不毛な議論を重ねるだけであるというの私がいいたいことである。

<注>

1. 私はこれまで聖書を引用するときつねに古い、しかし（というより、したがって）最も標準的と認められる、日本聖書協会の聖書を利用してきた。こんど「われは妬む神なり」という言葉の存在を確認するために同じ日本聖書協会が1997年に発刊した新共同訳聖書を開いてみた。この中に問題の言葉が「わたしは熱情の神である」と訳されているのを見て驚いた。ittたい、これは正しい訳なのか。もしそうだとすれば、これまでの日本聖書協会の聖書は読者を騙してきたことになる。これは日本の問題だけにとどまらない。英語の聖書にも“ I am a jealous god.” と書いてあるからである。

前後の文脈から判断すれば、これは「わたしはねたむ神である」を意味するとするのが自然である。この言葉は「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」の後にあり、「わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う」（この「問う」も古い聖書では「及ぼす」とあった）の前にある。したがって、その趣旨は「あなたがたがわたし以外の神を信仰するなら、わたしはその神を嫉妬し、あなたがたにあなたがたの子々孫々にわたって罰を加えるであろう」だということになろう。初期のキリスト教徒たちの解釈もこれであった。つぎの文はキリスト教グノーシス主義者の文である。

そして彼（ヤハウエ）は、自分を取り巻く被造物と、自分の周りにいる、自分から出た天使の大群を見たとき、彼らに言った。「我は妬む神なり。我のほかに神なし」と。しかし、こう告げることにより、彼は天使たちにほかの神も現に存在することを示したのである。なぜなら、もしほかに神がないのならば、彼はいったい誰を妬むことがあろうか。（『ヨハネのアポクリュフォン』）（エレーヌ・ペイゲルス著、荒井／湯本訳『ナグ・ハマディ写本』、p.76.）

この文で「妬む」を「熱情」に置き換えてみよう。「もしほかに神がないのならば、彼はいったい誰を熱情するがあろうか」という全くナンセンスな文章ができあがる。『ヨハネのアポクリュフォン』の作者が問題の言葉を「熱情」の意にとっていることはこのことからも明らかである。

新共同訳聖書の訳者たちは「妬む」と「熱情」を同義語と見るほど日本語に無知なのであろうか。それとも、なにか言語学的な発見をしたために訳語を変えたのであろうか。それとも、これらの訳者たちこそ読者を騙しにかかっているのであろうか。その動機は十分あると私は考える。「妬む」ではさすがにかれらの道徳的美意識も傷つくだらうからである。信者の獲得にも支障があるだらうからである。

かれらにそのような道徳的美意識があると考えることは、わたしに一種の安堵感をもたらす。かれらとわたしの間に思想的に共通の土壌があることが感じられるからである。しかし、わたしは一方で、かれらはかつてのゲノーシス主義者と同じ異端の道を歩んでいるのではないかと危ぶんでいる。